

あけのほし 2015 年 7 月 12 日

「自由と責任と聖書」

菊田行佳

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。…兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」

(ガラテヤ書 3 章 28 節、5 章 13 節)

今、国立大学では、人文科学（歴史・言語・哲学・文学など）の専攻科目がどんどん削られて行っているとのこと。理由は、国際社会において他国との競争に勝ち抜くためには、他のより役に立つ科目に力を注ぐためだということでした。そのような状況では、キリスト教の聖典である聖書などは、読むに値しない本の一番にあげられることでしょう。ただ、そもそも国際社会で競争に勝つことが、国民にとって大変価値のあることだと誰が決めたのだろうかと思うわけです。国立大学のいわばスポンサーは、税金を拠出している国民にあるわけですから、国民のだいたいの人が納得してるはずですが、しかし少なくとも自分は、勝手によく調べもしないで決めないで欲しいと考えるわけです。

ところで、今現在、国会や経済界が大変注目しているギリシアを始めとした EU 諸国の動向は、その国際社会においては、もはや日本とも切っても切れない関係にあるわけです。そこでは、ギリシアやドイツなどのヨーロッパの人々が、何に価値をおいて生きているのか、そのことを知らないままで、数字だけ、経済だけを切り離して考えていても、対応して行くことは困難でしょう。

一見、経済や政治とは縁もゆかりもない古典としての聖書ですが、その宗教的書物を教養の大切な一つとして読み解くことで、ヨーロッパの人々のものの考え方、生き方の選択の幅という事柄を、理解することが出来るのだと考えます。そしてその教養の学びは、単に経済や政治に仕えるだけにとどまらず、それらを批判的に検討することで、私たち自身の自己価値をも豊かに造り上げることが出来ることでしょう。

人間の歴史に関して、知られている限りでは、文化的な進化が最も早く進んだ地域は中東地域、つまり肥沃な三日月地帯、エジプト、シリア、メソポタミア（現在のイラク）を含む地域です。この地域で初めての都市、国家、文字が成立しました。ヨーロッパの歴史は、この世界の端に置かれた二つの小民族、イスラエルとギリシアから始まったのです。この二つめ小さい民族は、それらの巨大な世界と深く関わっていたにもかかわらず、彼らは意識的にその世界に対して反対しました。ギリシア人は、トロイアやペルシアからの独立闘争の歴史において、自分たちの自我意識を形成しました。それは、他国による支配の思想に反旗を翻し、人が自らのあり方を制御することで、誰かに隷属せず、自分たちの

ことは自分たち自身の責任において決めるという民主主義的な共同生活の形態を、世界で始めて形成したのです。

それと、軌を一にするように、イスラエルも北の大国アッシリア、バビロニア、ペルシアと南の大国エジプトに挟まれていましたが、これらの強国の奴隷の家から脱出を遂げた、自由になった身としての自我意識を形成しました。王の支配から（神が与えた）法による統治を選択し、それぞれの人が対等な立場で兄弟姉妹（上下関係なし）として、相互に権利を保証するという責任を担う社会構造を形成しました。そこでは歴史物語を通して、隣人の権利を踏みにじり、法をないがしろにして、不誠実に人々が生きた結果、どのような悲惨な結末を自民族が迎えたのかの罪と挫折の記憶を残しています。特に強調されているのが、「神の似姿」として造られている人間の尊厳を犯すことへの警告です。そして、神の造った自然を保ち、維持する責任をも、人が担っているといった点も特徴です。

これらの自らが依存しつつも、しかしその抑圧的な自己意識を形成する大国の人々に対して、徹底的に反対した二つの民族が、紀元前5世紀に出会うこととなりました。いわゆるヘレニズム時代と呼ばれる時です。ギリシア人とイスラエル人は、ここから密度の濃い対話に入り、やがて原始キリスト教を生み出しました。例えば、ギリシアではプラトンやアリストテレスなど哲学が有名ですが、人が生きるということを徹底的に、絶え間なく試みて行くことが、イスラエルにおける「神を知る」ということと結び合います。

「すべてを吟味し、良いものを大事にしなさい」（1テサロニケ書5章21節）、または「何が神の御心であるかわきまえなさい」（ローマ書12章2節）などの新約聖書の箇所、そのことを知る事が出来ます。

冒頭の聖書箇所では、外国人、奴隷、女性などの古代世界で自由が許されなかった人々も含めた、すべての人が自由を享受する共同体の思想を見いだす事が出来ます。そしてその自由を与えられた共同体の特徴は、構成員のすべてが自らの自由を、互いに奉仕し合うために発揮することにあるのだということがわかります。より自由な生き方を求めたギリシア人の自我意識は、イスラエル人との深い対話の中で、他者への責任を担うということにおいて、よりその自己価値を高めることに成功したわけです（例えば現在のギリシア危機においては、ギリシア人は、自国の自由意思を主張するだけでなく、EU全体に対して対等な責任を果たすことに自らを向けるといった具合です）。

私たちが、これらの古典から学んだ自由と責任の関係を、沢山の生活の場面で生かす事が出来ると思います。誰かが抑圧的に心を縛り上がられている状況があれば、それがどこであれ、私たちはその関係に「NO!」と言うべきです。それが直接自分に関わることでなかったとしても、見て見ぬふりをする事は、いつか自分につけが回ってくるのだと、全体に対する責任を考えるべきでしょう。学校であれ、職場であれ、たとえ教会であっても、神が与えた自由と尊厳を犯してはならないのです。それは、たとえ自分自身が加害者の時であっても、批判的に聖書の言葉を向けるべきです。その時始めて、私たちは本当の意味で教養を身につけたのだと言う事が出来るのだと思います。